

劇  
35ミリ  
カラー／64分

- 企画  
貯蓄増強中央委員会

スタッフ

- 製作  
村山英治
- 脚本  
千葉茂樹  
堀内 甲
- 演出  
堀内 甲
- 撮影  
佐藤昌道
- 音楽  
間宮芳生
- 助監督  
篠原 茂
- 製作主任  
高島道吉

- 出演  
照代： 小峰千代子  
順造： 山田巳之助  
久子： 中西妙子  
三郎： 高原駿雄  
信男： 小栗一也  
明美： 平松淑美  
矢巻： 野村昭子  
薬局主： 瀬良 明  
他

文部省特選  
〔推薦〕  
厚生省  
日本PTA全国協議会  
全国日本青年団協議会  
全国地域婦人団体連絡協議会  
優秀映画鑑賞会  
1965年教育映画祭最高賞・文部大臣賞  
第15回東京都教育映画コンクール金賞  
NHK賞  
1965年キネマ旬報文化映画ベスト・テン第2位

この映画は戦後の経済成長を物語る団地アパートを舞台に、現代の孤独な老人を描いている。彼らを苦勞して育てた老人たちは、団地に住む若い家族に身を寄せても居心地悪く孤独である。老人の存在を忘れたような団地アパートの建て方も現代を象徴している。人々は日々の生活に追われ、周囲にはエゴイズムが渦巻いている。老人の不幸も実はその中にある。桜映画社ではこの時期、家庭や家族の在り方を問う映画を次々と製作した。



中島照代（65歳）は、団地に住むタクシー運転手の息子三郎の家庭に身を寄せている。まだ達者で孫の世話も炊事も引き受けているので、嫁の久子はパートタイムで働き、三郎も個人タクシーの開業をめざして精を出している。

ある日、照代は団地自治会の新聞を配った帰り道、田舎から出てきたばかりの岡本順造（69歳）に出会った。順造は、苦勞して大学を出した息子の事業の失敗で田舎の家まで手放し、娘の明美の所に身を寄せている。



明美の夫はサラリーマンで、表面は派手だが内実は生活に追われている。明美は父を引き取ったことに対する夫への気兼ねや、高校生の長男の受験勉強の邪魔になるのではという不安から、つい順造にきつく言ったりする。

順造は福祉事務所を訪れ老人ホームに入ることを考えるが、無料のホームは子供がちゃんとしている場合入れず、有料は月1万円余かかると知ってあきらめる。

それに比べるとまだ幸福なはずの照代も、孫を甘やかすなど幼稚園の先生に注意されたり、三郎の会社の家族慰安会の切符に自分の分がなくて1人取り残されたりすると、余計者のみじめな気持ちを味わう。

順造を励ました夜、照代は鉛筆を手にして「拝啓 団地新聞様、年寄りの私らのなやみを聞いて下さい」と手紙を書いた。「おばあちゃんの手紙」は団地の新聞によって反響を呼ぶ。

一方、明美は順造が誰にも相談せずに近くの病院で働き始めたことを知り、その病院を訪ね、老いてなお働こうとする父の姿をみて感動する。この話を聞いた明美の夫も、義父の不運と重ね合わせて自身の老後を改めて考え、夫婦の間にも老父に対する理解と温かい感情が湧いてきた。